
III. 調査成果の概要

1. 登録遺跡の分類体系

本プロジェクトにおける遺跡分類体系は、5つの大分類と15の小分類により構成される。94件の各登録遺跡は、この分類体系のうちいずれかの項目に分類されることになる。なお、1つの遺跡が複数の遺構を含む場合には、複数の項目に分類されることもしばしば生じる。このため、分類項目別の集計では、1遺跡が複数回数えられることになるため、分類別集計全体の総計は、全登録遺跡数よりも必然的に多くなる。

以下では、各小分類の定義について簡潔に解説する。

【居住址 (Settlement)】

居住地とそれに関連する防御施設を含む。

a. 都市 (City)

大規模な遺丘とそれを取り囲む周壁を有する大型居住址である。チュー渓谷を含む中央アジアにおける6～12世紀頃の都市構造は概ね共通している (cf. ケンジアフメト 2009: 240; バルトリド 2011a: 79–83)。中心部には内城 (シャフリスタン Shakhristan) が位置し、多くの場合、周囲地表面から数 m 高まった遺丘を成し、遺丘上面縁辺部には塔を伴う堅固な城壁が廻る。シャフリスタン内部、あるいはシャフリスタンの城壁上の一部には、周囲よりも顕著に高くなった城塞 (シタデル Citadel) が存在する。シタデルには、都市の支配者が居住したと考えられている。シャフリスタンの周辺には、広大な外城 (ラバト Rabat) が広がる。ラバトは、1重または2重の長大な外周壁により外部とは隔絶された居住区となっている。

都市の規模は、シャフリスタンだけで10 haを超える。

b. 町 (Town)

都市よりも規模が顕著に小さく、都市の構成要素 (シャフリスタン、シタデル、ラバト) のいずれかを現状で欠く、中型居住址を指す。町にも規模の違いがあり、中核部 (遺

丘)の規模が概ね6 ha以上の面積を有するものを「大型」とし、4 ha程度のものを「中型」に細分している。

c. 城塞 (Fort)

方形の囲壁や小型の遺丘から成り、面積が1 ha未満の小型居住址である。都市や町の周辺の要衝や、見晴らしの利く丘上に位置することから、遺跡への居住とともに、大・中型居住址を防御する目的も有していたと考えられる。

d. 望楼 (Watchtower)

方形遺構から成る小規模遺跡 (面積1,000 m²未満)である。しばしば四隅に塔を有する。都市や町の周縁に所在しており、防御目的の施設と考えられる。

【生活遺構 (Domestic remain)】

日常生活に関わる痕跡である。

a. 建物遺構 (Isolated building)

耕作地縁辺に多く分布する小型の矩形建物跡である。単独あるいは2～3棟がまとまって所在する。おそらくは農耕に関わる一時的な利用のために造られたのだろう。

b. 囲い込み遺構 (Enclosure)

調査地域で多くみられた、土塁と周溝から成る遺構である。土塁・周溝の内側は平坦面であり、いかなる遺構も認められない。ほとんどが円形や不整円形を呈するが、稀に矩形のものも存在する。また、稀有な事例として、石造りの囲い込み遺構 (S041) が1基ある。同遺構は、単独で存在する場合と、複数の近接して造られる場合がある。

機能の特定は現状では難しいが、おそらくは遊牧に強く関係した遺構と考えられる。

c. 逗留地 (Encampment)

土塁と溝により区画された平坦面を伴う矩形遺構であ

る。本プロジェクトでは、1 件のみ (S038) がこれに該当する。遊牧民の逗留地と推定したが、機能は不明である。また、囲い込み遺構の中にも逗留地の痕跡が含まれる可能性もある。

【葬祭遺構 (Funerary remain)】

埋葬や葬送儀礼に関連すると考えられる遺構から成る。

a. クルガン (Kurgan/Tumulus)

墳丘基部の直径が 15 m 以上、現況で高さ 2.0 m 以上が残る大型円墳であり、複数基がおおよそ南北 1 列に並ぶ。特に大型のものは直径 50 m を超える。N039 のみが現在単独で存在しているが、おそらくは農地開墾で他のクルガンが削平された結果であろう。こうした墳墓の築造は、鉄器時代前期に遡ると考えられる。

b. 墓地 (Cemetery)

多数の墓から成る共同墓地と看做しえる遺跡である。墓は主として小規模な円墳から成り、直径 2.0 ～ 10 m、高さは 1.0 m 未満である。より大きな直径 10 m 程度の円墳から成る墓地ではせいぜい 5 ～ 10 基程度しか見られないが、より小さな円墳から成る墓地では、数十基の墓が認められた。

年代決定は難しいが、鉄器時代後期から近世にかけて築造されたと推定される。

c. 単独墓 (Grave)

1 基あるいは 2 ～ 3 基のみで存在する墓である。多くは円形を呈し、墳丘部とこれを取り囲む土塁・周溝により構成される墓である。1 基は隅丸長方形 (S029)、1 基は長円形 (S038-2) の平面形を呈していた。円墳の場合、基部の直径は常に 15 m 未満に収まり、直径 10 m 程度のものが主体を占める。

d. 追悼遺構 (Memorial enclosure)

外側に土塁、内側に周溝が廻る方形の小型遺構である。規模は様々であるが、1 辺 10 ～ 20 m が多い。周溝の内側には平坦面のみが見られる。本プロジェクトでは Zone I においてのみ当該遺構を確認しており、そのほとんどが小河川東岸に位置していた。遺構の構造や立地から、また、稀に採集できた土器の型式・年代から、モンゴル高原や南シベリア周辺に多く分布する、突厥の追悼遺構と同種の遺構と考えている (cf. 林 2005: 48–51)。

【遺物散布地 (Artifact scatter)】

遺構を伴わず、遺物の散布のみが見られる遺跡である。

a. 土器散布地 (Ceramic scatter)

土器片が主体的に散布する遺跡である。本プロジェクトでは N018 のみがこれに分類される。

b. 石器散布地 (Lithic scatter)

石器が主体を占める遺物散布地であるが、本プロジェクトでは当該カテゴリーの遺跡は皆無である。

【その他遺構 (Miscellaneous feature)】

上記 4 つの大分類のいずれにも該当しない遺跡をまとめた。

a. 複室遺構 (Multi-room feature)

N033 においてのみ 2 基が認められた、不整矩形を呈する比較的大型の遺構である。内部は、溝によって複数の空間に区画されている。時期・機能ともに不明である。

b. 石列 (Stone alignment)

本プロジェクトでは、S033 のみが確認された。粗い石積みによる、S 字形に彎曲する石列である。時期・機能ともに不明である。

2. 調査の成果

本プロジェクトにおいて登録した計 94 遺跡のうち 7 遺跡は、遠方からの観察の後、衛星画像上で確認・記録したクルガンである。また、94 遺跡のうち、4 遺跡はテレノジュキンにより、9 遺跡はコジェミャコによりかつて調査されており、2 遺跡では地元考古学者により発掘調査が行われた (表 3.1)。

前述のとおり¹⁾、様々な制約のため、調査地域全体を面的に網羅する悉皆踏査の実施は叶わなかった。しかしながら、調査方法の工夫により、耕作が及んでいない、あるいは、徹底した削平が行われていない現地表面において、近現代以前と考えられる地物の多くを効率的に記録でき、地域文化史を再構築するための有意義な遺跡データを得ることができた。このデータを用いて、以下では調査成果の概要を示したい。

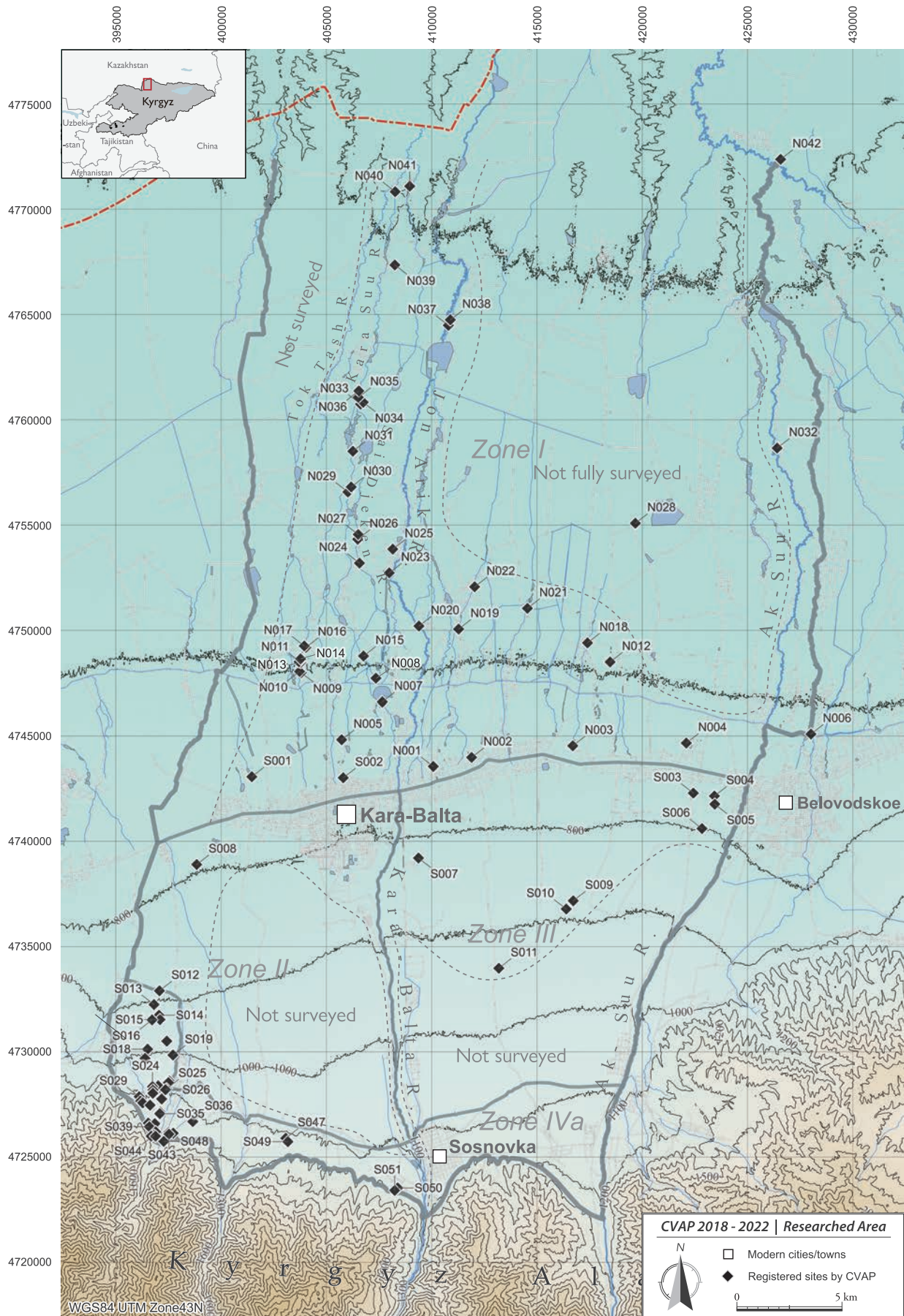


図 3. 1 登録遺跡分布図

2. 1. 遺跡の分布傾向

まず、全体的な遺跡分布を見ると、Zone I 西部と Zone IVb に多くの遺跡が集中していることがわかる（図 3. 1-2）。もちろん、これは踏査密度の偏りを一義的には示しているが、仔細に観察すると一定の傾向を見出すことができる。Zone I 西部では無数の小河川が南から北に貫流しているが、このうち東寄りのジョン・アリク（Djon Arik）川は、南から流れてくる主要河川カラ・バルタ川の北延長部分に相当し、Zone I における主要河川である。それにもかかわらず、ジョン・アリク川流域において確認できた遺跡は、わずか 6 件にとどまる（図 3. 3）。さらに、この 6 件中には都市と町が含まれていない。他方で、ジョ

ン・アリク川の西側を南北に流れるカラ・スウ（Kara-Suu）川岸では、15 件の遺跡を確認できただけでなく、これらには都市 1 件（N005 シス・トベ）と町 1 件（N040）が含まれている。また、カラ・スウ川の東西両側をそれぞれ流れるサイ・ジェケン（Sai-Djeken）川とトク・タシュ（Tok-Tash）川の流域には、都市や町は所在しないものの、ジョン・アリク川流域での件数を超える遺跡が位置している。以上の北西部における遺跡分布傾向の差は、おそらくシス・トベに起因すると考えられる。シス・トベが所在するカラ・スウ川流域とその周辺では、当該都市が機能していた期間中は居住活動が活発であったため、ジョン・アリク川流域に比べて多様な遺跡が残されたのだら

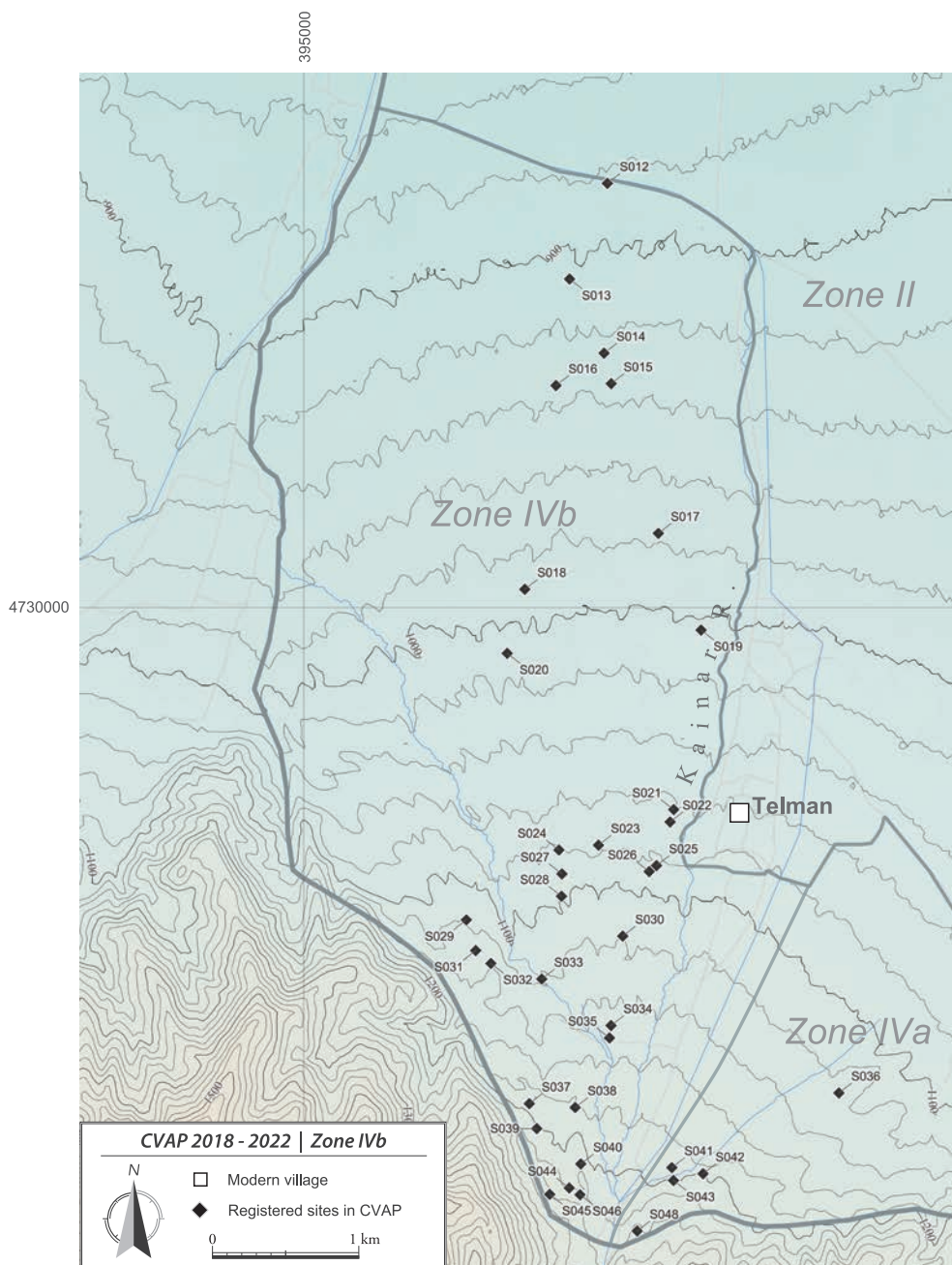


図 3. 2 登録遺跡分布図 (Zone IVb)

表 3.1 既調査遺跡一覧

Site No.	Site Name	Researched in 1929 by Тереножкин	Researched in 1954- 1955 by Кожемяко
N001	Novo Nikolaevka	Тереножкин 20126: 59	Кожемяко 1959: 135-136
N002	Petropavlovka	-	Кожемяко 1959: 137
N003	Poltavka	-	Кожемяко 1959: 122-125
N004	Petrovka	-	Кожемяко 1959: 145-146
N005	Shish Tobe	-	Кожемяко 1959: 79-84
N006	Belovodskoe Krepост	-	Кожемяко 1959: 97-99
N021	Komintern	-	Кожемяко 1959: 137
N032	Ak-Tobe Sretenskoe	-	Кожемяко 1959: 99-102
N042	Ak-Tobe Toleskoe	-	Кожемяко 1959: 118-122
S003	Petrovka 4	Тереножкин 20126: 62-63	-
S004	Petrovka 3	Тереножкин 20126: 62	-
S005	Petrovka 1	Тереножкин 20126: 62	-
S006	Kara-Balta	Тереножкин 20126: 58	-

う。

Zone IVb にも遺跡の集中が見られる（図 3.2）が、これは同地域が大規模な農地開拓を受けておらず、小溪谷と小規模な段丘面が連続するかつての地勢を保存していることに起因する。実際、Zone IVb の北方、Zone II 西部には平坦に削平された農地が広がっており、クルガンと近現代の廃墟を除いて、遺跡を確認できなかった。加えて、同地はキルギス山脈北麓に位置しており、飲用水が豊富に流れて牧草地も卓越することから、遊牧に大変好ましい。このため、主に遊牧民により、歴史的に盛んに利用されてきたことが容易に推測される。

2. 2. 遺跡種類の出現傾向

次に、遺構種類別の遺跡数について概観する（図 3.4）。調査地域全体で、葬祭遺構は 43 遺跡（全体の 41.0%）において確認されており、遺跡分類中で最多を占める。

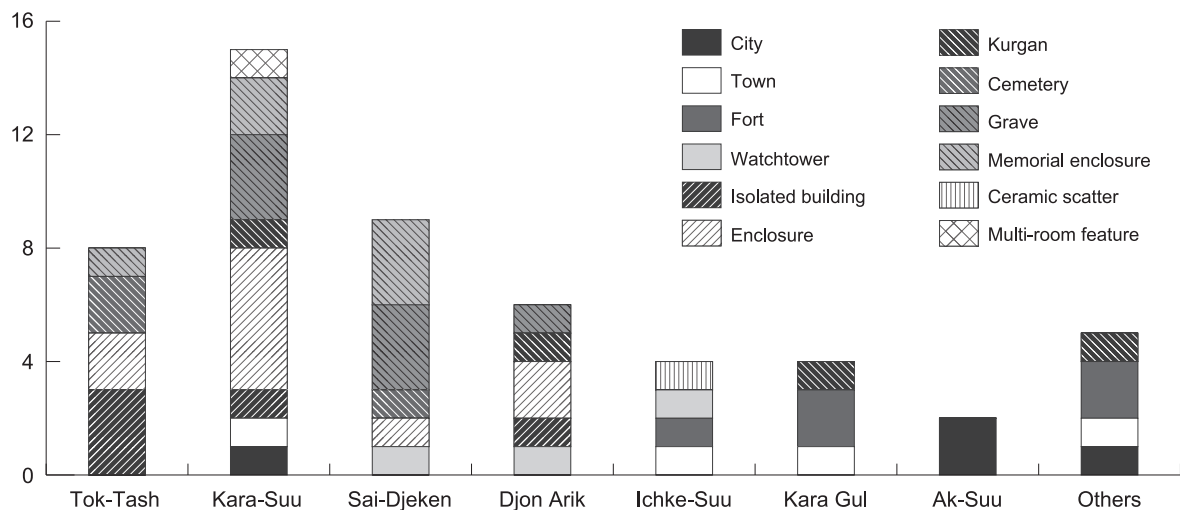


図 3.3 小河川流域別分布遺跡数

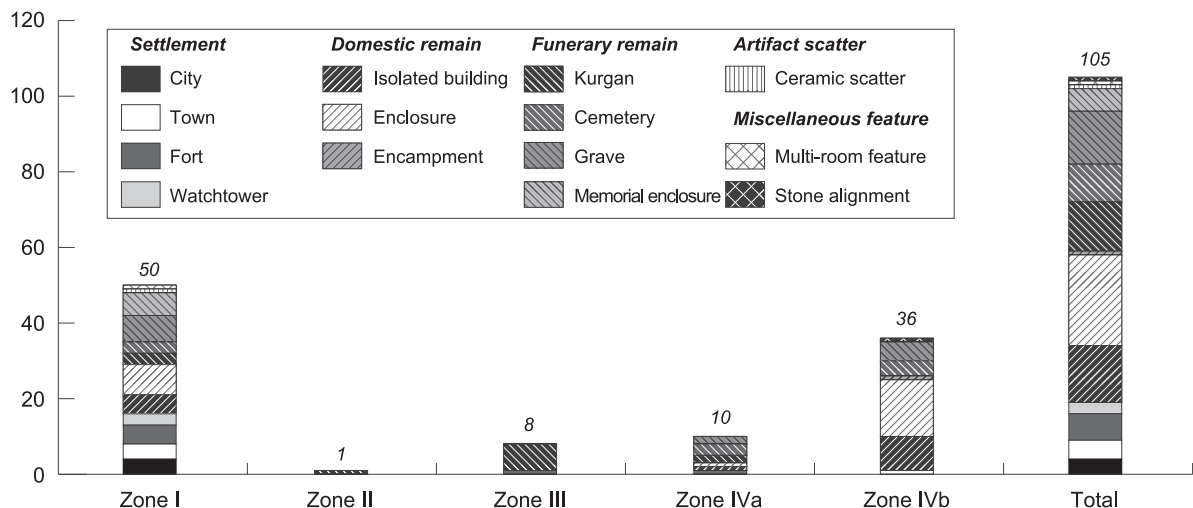


図 3.4 遺構種類別出現傾向

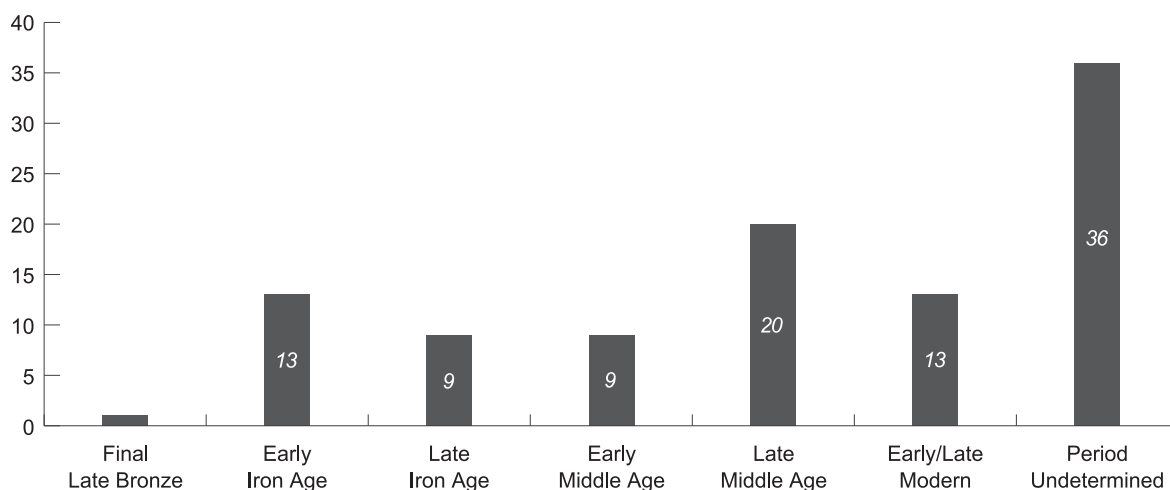


図 3. 5 時期別遺跡数

表 3. 2 時期別・種類別遺跡数一覧

Category	Type	Final LB	Early IA	Late IA	Early Mid	Late Mid	Early/Late Modern	UD	Total
Settlement	City	0	0	0	3	4	1*	0	4
	Town	0	0	0	0	5	0	0	5
	Fort	0	0	0	0	6	0	1	7
	Watchtower	0	0	0	0	3	0	0	3
Domestic remain	Isolated building	0	0	0	0	0	9	6	15
	Enclosure	0	0	0	0	0	0	26	26
	Encampment	0	0	0	0	0	0	1	1
Funerary remain	Kurgan	0	13	0	0	0	0	0	13
	Cemetery	0	0	7	0	2	3	0	10
	Grave	0	0	2	0	0	0	12	14
	Memorial enclosure	0	0	0	6	0	0	0	6
Artifact scatter	Ceramic scatter	1	0	0	0	0	0	0	1
Miscellaneous feature	Multi-roomed remain	0	0	0	0	0	0	1	1
	Stone alignment	0	0	0	0	0	0	1	1

* これはペロヴォドスコエ・クレボストであるが、近世・近代は都市ではなく小村落である。

なかでもクルガンは、その規模の大きさと存在感において圧倒的であり、Zones II・IIIを中心に、Zone IVbを除く調査地域全域にわたって広域に分布していることがわかる。他方、墓地と単独墓はZones I・IVにのみ分布する。追悼遺構は数が少ないものの、Zone Iにおいてのみ認められた。

葬祭遺構に次いで多い生活遺構（40件、全体の37.1%）はZone IVbにその多くが分布しており（25件）、同地区全体の69.4%を占める。Zone Iの生活遺構（13件）はZone IVbに次ぐ多さであるものの、同地区全体の26%を占めるにとどまる。その面積の狭隘さと相俟って、Zone IVbにおける生活遺構の密集状況は明らかである。なお、生活遺構に分類した囲い込み遺構と建物遺構の間には、分布傾向の差異は認められない。

居住址は、そのほとんど全て（19遺跡中16遺跡）が

Zone Iに集中する。Zone I以外では、Zones III・IVaにそれぞれ1件の城塞（S011及びS051）が、Zone IVbに中型の町1件（S026）が認められた。居住址の多くは、6世紀にソグド人により建設され、12世紀にかけて発達した都市システムに由来すると考えられる。

上記の他に確認した、土器散布地とその他遺構は件数が極めて僅少であり、分布傾向の把握が難しい。

2. 3. 時期別遺跡数

最後に、時期別遺跡数の変遷について概略を述べておきたい。考古学踏査による遺跡の時期決定は、一般的に表採遺物に依ることが多い。ところが、本プロジェクトの調査対象地域では、遺物は都市・町に分類される居住址においてのみ表採可能であり、耕作活動による地下土層からの巻き上げ等のため偶然採集できた数例を除け

ば、小規模遺跡における表採遺物は皆無であった。このため、遺跡・遺構自体の構造、遺跡の立地、遺構同士の先後関係、また、当地の歴史的背景や先行調査に基づいて、確認した遺跡・遺構の時期を推定するより他なかった。

これまでの調査研究から²⁾、調査対象地域の利用は鉄器時代（前8～後5世紀頃）と中世（後6～14世紀頃）に最も盛んであったことが判明しており、多くの遺跡がいずれかの時期に位置づけられる（図3.5）。鉄器時代以前に位置づけられる遺跡は、おそらくは後期青銅器時代末（前10～前9世紀頃）の所産と考えられる1件のみである。鉄器時代の遺跡は、22件のクルガンと円墳群から成る。その規模から判断して、クルガンを鉄器時代前期、円墳群を鉄器時代後期の所産と看做せる。中世の遺跡は主として居住址から成り、最大で計26件を数える。こ

のうち中世前期（6～8世紀）の所産は9件であり、6遺跡の追悼遺構を含んでいる。中世後期（9～14世紀）と考えられる遺跡は20件あり、やはりそのほとんどが居住址に分類される。近世・近代（15～19世紀）には、本プロジェクトにおいて記録した遺跡は13件にとどまる。しかし、特に19世紀頃に位置づけられうる比較的新しい時期の建物遺構を、Zone I 及び Zone IVb の踏査中に数多く確認しているので、実数はこれよりもかなり多くなるだろう。上記の他、年代不明な遺跡が36件存在する。これらは、囲い込み遺構、小規模な建物遺構、そしてその他遺構に分類した各種遺跡から成る。

註

1) 本書第I章第2節「調査の方法」を参照。

2) 本書第II章第2節参照。